

Kodak Color Control Patches

Blue

Cyan

Green

Yellow

Red

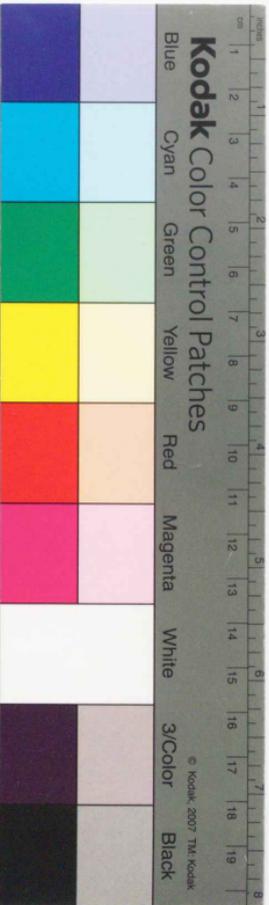
Magenta

White

3/Color

Black

© Kodak, 2007 TM, Kodak



Kodak Gray Scale

C

Y

M

© Kodak, 2007 TM, Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿

- ◆ ようこそ中山道鶴沼宿へ
- ◆ 私たちが案内をしています
- ① 杉木立のうとう坂
- ② 伊能忠敬とねぶか雑炊
- ③ 石地藏供養碑
- ④ うとう峠の一里塚
- ⑤ 赤坂の地藏堂
- ⑥ 赤坂神社と灯籠
- ⑦ 復元された高礼場
- ⑧ 傍示石と村境
- ⑨ 英泉の鶴沼宿図絵
- ⑩ 大安寺大橋
- ⑪ 鶴沼宿のたたずまい
- ⑫ 鶴沼宿町屋館
- ⑬ 鶴沼宿本陣桜井家
- ⑭ 脇本陣「緑風」
- ⑮ 芭蕉の句碑
- ⑯ ニノ宮神社と保食大神の石碑
- ⑰ 旅籠梅田家（茗荷屋）
- ⑱ 中山道分間長絵図 灯籠と祠（ほこら）
- ⑲ 火の手を防いだもちの木
- ⑳ 石亀神社と鶴沼石
- ㉑ 弘法堂と石仏群
- ㉒ 空安寺
- ㉓ 衣裳塚古墳
- ㉔ 一年を振り返って



## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿



私たちが  
案内をしています

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



ようこそ中山道鶴沼宿へ

ようこそ中山道鶴沼宿へ。皆様を心より歓迎いたします。

魅力ある都市の三条件は、都市の中の自然、都市の中の歴史、そして都市の中の文化です。歴史の未来への継承は、都市の大切な使命です。

各務原市長  
森 真



江戸時代、この各務原市域を東西に横切る中山道の周りには「各務野」と呼ばれる野原が広がり、その東には中山道五十二番目の宿場・鶴沼宿、西には「間の宿」新加納立場が栄え、旅人の疲れを癒す場でした。

市では各務原市東部の鶴沼地区を、ここの中山道鶴沼宿のほか、村国座、皆楽座といった歴史的建造物が密集する「各務野歴史街道」として位置付け整備しています。特にその拠点である中山道鶴沼宿は、往時をしのばせる風格ある宿場町となるように平成十八年から五カ年の歳月をかけ再生整備事業を開始、平成二十年からはボランティアガイドによる鶴沼宿・歴史街道のガイドサービスを始めました。

新しく完成した江戸時代の面影漂う「中山道鶴沼宿」。どうぞこゆっくり歴史の香りをお楽しみください。

私たちは中山道鶴沼

宿ボランティアガイド

の会のメンバーです。

私たちが鶴沼宿のガイド

下を始めて間もなく、二

年になります。

平成二十二年四月か

ら約一年間二十四回の

予定で、市内を通って

いる中山道の東、鶴沼

宿とその近辺の歴史遺

産などを紹介します。

二年にわたってお互い

に交流しあった情報や

地域の人々から教えて

いただいた事柄も入れ

ながら、楽しく読んで

いただけるシリーズに

ださい。

したいと思っています。

ガイドをしていて、

多くの人から「長年地

元に住んでいながらこ

んな場所があるとは知

らなかつた」など、う

れしい話もお聞きして

います。今後この連載

を続けて読んでいただ

くことで思いがけない

発見があるかもしれま

せん。

さて、東の江戸・木

曾路方面から旅をして

来たということにして

次号は「うとう坂」を

案内します。ご期待く

## 訪ねてみよう中山道鶺沼宿

①

### 杉木立の うとう坂



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

中山道が東から各務原市に入るのは「うとう坂」からである。その入口は、坂祝町勝山の国道21号線とJR高山線の下をくぐる谷川の横につくられて

いる。明治になって街道が廃止されると、うとう坂から峠はすっかり荒れてしまったが現在は完全に整備されている。杉木立の山道を、かなせせらぎの音など聞きながら歩いてみると、江戸時代へタイムスリップしたような

気がしてくる。皇女和宮は江戸へ下るとき、この峠道をどんな気持ちで通ったのだろうか」とふと考えた。峠は途中から石畳になり「もりの本やさん」(市の図書館)の前で終わりになる。この間ゆつくり歩いても三十分、もちろん車は通れない。うぬまの森の駐車場を利用して歩いてみることをせひおすすめしたい。

まんさくの

花を訪ねて

うとう坂

## 訪ねてみよう中山道鶺沼宿

②

### 伊能忠敬と ねぶか雑炊



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

ねぶか雑炊の再現を試みる

今から二百年前の文化六年(一八〇九)十月十七日早朝、伊能忠敬ら測量方は太田宿から鶺沼宿に向かった。実測による正確な日本地図を作製するという大事業を成し遂げた忠敬は、この時六十五歳。ロマンと情熱を持ち続け生涯現役を通したその生き方に多くの人々が勇気付けられている。観音坂を越え、うとう坂を登り、峠の上で昼食をとることになった。一行十七人は、鶺沼宿側が用意したねぶ

か雑炊を多く食べたという。鶺沼宿の人々は、どんな思いをもって、もてなしたのでろうか。温かいご飯にたっぷりのねぎと油揚げを煮込み、あつあつを食べる。これがうまい。

私どもは、ねぶか雑炊を郷土の食として復活させるべく、いくたびかその再現の試みを重ねている。伊能忠敬とねぶか雑炊が見直され、いずれ鶺沼宿で歴史的食材として蘇り、伝承されていくことを願いながら。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

④

うとう峠の  
一里塚



市内に唯一現存するうとう峠の一里塚は、峠を西側にやや下ったところであり、道の南北にあった。

江戸から数えておよそ百番目、今でも北側に往時を示す北塚（饅頭形、直径十尺、高さ二尺）が残っている。南塚は、戦時中陸軍の兵舎が建てられ、半分以上崩れている。ここ以外に三カ所、各務山の前、六軒東方、新加納付近にもあったが、現在は全て消失してしまっている。

一里塚とは江戸（東京）から一里ごとにつけられ、旅人にとって距離の目安、馬や駕籠（かご）の乗り賃支払いの目安となり、日差しが強い日には木陰の休み場所でもあった。江戸時代の交通・宿駅制度に基づくものであるが、当時の旅人の苦勞がしのばれる重要な史跡であり、歴史的財産といえる。二期一会はもちろん、貴重なる出会いの場でもあり、情報交換の場でもあったに違いない。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

③

石地蔵供養碑



「えっさ、えっさ、えっさ、えっさ」という人は大店（おおかご屋だ、ほいさつだ）の番頭か村役人だったのだろうか。道。小田原提灯ぶらさげて…

小田原宿から京方面へ向かっていた旅人がやっとの思いでこの峠にたどりついた時、盗賊におそれ殺害されたと思われる人の石碑が建てられている。上部に地蔵を刻み、下に小田原宿喜右衛門菩提」とある。

東からの中山道最後の難所ともいわれた

今日も峠を越えて歩く人がいる。峠のそばの木の下に旅の安全を願って石地蔵供養碑は立っている。

右衛門は、さぞ心細く気味悪かったに違いな。大声で歌いながら自分を元気づけたのだろうか。

坂を上ってみる。うっ着とした杉林一面に囲まれた谷間の山道。喜右衛門は、さぞ心細く気味悪かったに違いな。大声で歌いながら自分を元気づけたのだろうか。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑥

### 赤坂神社と 灯籠

とちろ



赤坂神社は中山道鶉沼宿の東の入口「盲附」付近に位置し、寛政の文化年間に作られた中山道分間延絵図には天王社一ノ宮社と記され江戸時代を通じて天王社と呼ばれていた。牛頭(ニウ)天王(ニウ)病除けの神をまつり、参道西側の灯籠常夜灯には享保十年(一七二六)東町氏子の表記があり、鶉沼村東町の氏神様として信仰を集めていた。参道入口東側街道沿いに江戸時代には高札場があり、多くの人が親しまれている。

の人が「天王社」に参拝した様子がうかがわれる。中山道沿いの参道入口にある自然石籠(鶉沼右)でできた灯籠は宝暦六年(一七五六)と刻まれてあり以後、中山道を歩く多くの旅人を見守ってきた。なかでも皇女和宮輿入れの二万人の行列にはさぞかしびつくりしたことがらう。

赤坂神社と名前を交えたのは明治以降と思われる。現在も鶉沼東町の氏神様として町の

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



中山道鶉沼宿ボランティアガイド

⑤

### 赤坂の地蔵堂



「気の毒になあ。この地蔵さん三回も交通事故に遭われたんや。わしが嫁にきて三十年になるんやが不思議なことに祠(ほこら)が壊されても地蔵さんだけは無事でな。有り難いことや」

うとう峠より鶉沼台の南を一気に下る。下りきった所で直角に西へ曲がる。そこに赤坂の地蔵堂はある。近くの人たちにより花が絶やすことなく供えられている。地蔵尊には、赤頭巾や前垂れも掛け

てある。宝暦十三年(一七六三)、「女人十二講中」と刻まれている。台座の左右には「左ハ江戸寺、右ハさいしよみち(在所道)」とあり、道しるべとして建てられたものであろう。

江戸時代に東から急坂を下ってきた旅人や西から鶉沼宿を出て東の赤坂・うとう坂へと旅した人たちは、この地蔵にどんな願いをかけて手を合わせて通り過ぎていったのだらうか。

## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

### ⑧ 傍示石と村境

国道21号線坂祝バイパスが交差する「鶴沼中山道」南側の東西に、傍示石（ほうじせき）が設置されている。高さ百八十センチの四角柱で、是より東尾州領「是より西尾州領」と彫られている。尾州領鶴沼村と幕府領各務村とを横切る中山道に村境を明示するため尾張藩が建てたようである。

「中山道分間延絵図」にも標示されているこの石標は、明治維新後不要となり他に移設されていた。

今回、推定所在地を測定したところ各務村境東傍示石は、大安寺川の西、鶴沼羽場町一丁目N.T.T鶴沼ビルあたり、各務村境西傍示石は、東側傍示石から西へ向かい鶴沼各務原町四丁目馬場医院付近となる。

江戸時代を通じて各務原の地は、一人の領主によって支配されるということはなかった。それぞれの領主により、厳しい年貢の取り立てが行われ境界を明示することが必要だった。

## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿



中山道鶴沼宿ボランティアガイド

### ⑦ 復元された高札場

昨年三月に開通した坂祝バイパスと中山道の交差点東北角に高札場が復元された。江戸時代にはここから東三百餘ほどの赤坂神社門前にあつたものである。

高札場とはいわゆるお上（かみ）からの通達で今の広報板である。次の宿までの駄賃のほか、キリンタンや百姓一揆の厳罰、火事泥棒の用心などの治安、夫婦は仲良く、子どもは大切に、老人をいたわり、仕事に精を出せなどの道徳に関すること

まで多岐にわたっている。そんな中で不思議に思われるのは、キリンタン信者や泥棒などいかなる重罪人も自ら申し出た者にはその罪を許され糞（ほう）うぶまで下されることである。

天保十四年（一八四三年）、駄賃（運賃）は加納まで馬一頭（荷物四十貫、約百五十キ）で二百四十九文だった。今の金で五、七千円くらいと思われる。人足は馬の半分だった。

当時の生活の一端を伺い知ることが出来る。

## 訪ねてみよう中山道鶺沼宿



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

### ⑩ 大安寺大橋

新しくできた坂祝バスパスを過ぎると、まもなく大安寺川にかかる橋を渡る。この川を挟んで西町と東町に分かれている。橋のたもとからすぐ西に本陣・脇本陣、東に問屋場があり、この辺りが宿場の中心である。

この川には江戸時代長さ八間(約十四・四丈)の木橋がかけていた。今、川の兩岸はコンクリートの護岸になっているが、橋には木製の欄干と橋のたもとに常夜灯が設けられ、柳の木とともに昔の風情が感じられる。橋から大安寺川を上流へ一きぼほどさかのぼると臨濟宗妙心寺派の古刹、大安寺にいたる。大安寺は室町時代の十四世紀末に、美濃国守護代六代土岐頼益の創建によるもので、往時は数多くの塔頭を持つ大寺院であった。欄干にもたれ、西の方を眺めると、酒蔵の向こうに古い民家が立ち並び、わが故郷の景観も満更(まんさら)ではないなと思わせる。

## 訪ねてみよう中山道鶺沼宿



中山道鶺沼宿ボランティアガイド

### ⑨ 英泉の鶺沼宿図絵

鶺沼宿のほぼ中央に曾川左岸から鶺沼宿を大安寺川が流れ、大安寺大橋がある。その畔ときわ高く見えるのは、江戸の絵師溪斎英泉(けいさいえいせん)が描いた「鶺沼ノ驛從犬山遠望」の浮世絵レプリカがある。

溪斎英泉は美人画で知られているが、名所絵(風景画)にも定評があり、歌川広重と合作で天保六(1835)年ごろ完成させた「木曾街道六十九次」は71図の内24図が英泉の作である。「鶺沼ノ驛從犬山遠望」はそのうちの一枚で、木曾川を配し、一その渡し舟が水面を進み岸辺には人々が集まっている。その先に鶺沼宿の家並みが見える。しかし、犬山城と鶺沼宿を見渡せる場所はなく英泉は、西村中和が画いた「木曾路名所図会 犬山針綱神社」の一部を参考に、当地には訪れず想像で描いたと推測される。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿

### ⑪ 鶉沼宿の

### たたずまい

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



中山道六十九次のうち京へ向かって五十二番目の宿場である。太田宿から二里(約八き里)のところにある。

東から赤坂の下で直角に西方に曲がったあたりから西の葦(よし)池下まで七町半八間(約八百四十ど疋)あり、ほぼ中央を横切る大安寺川で東町と西町に分かれている。

沿道には本陣・脇本陣・問屋・旅籠(はたご)などが置かれ天保十四年(一八四三)の記録によると、全家数六十

八軒(旅籠二十五軒・人口二百四十六人)となっている。

現在、宿としてのたたずまいを残す建物には天保五年(一八三四)に建築されたとされる茗荷屋(梅田直道氏宅)がある。濃尾震災でほとんど壊滅したが、幸いにもこの旅籠だけは倒壊を免れた。

平成十八年四月から五年計画で「鶉沼宿町並み再生事業」が進められている。歴史的建造物としての保存がなされつつある。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿

### ⑫ 鶉沼宿町屋館

中山道鶉沼宿ボランティアガイド



このシリーズも半ば、鶉沼宿の中心部にある町屋館にやつてきた。明治二十四年の濃尾地震で江戸時代からの建物が倒壊したあと、明治末期に建てられた旧武藤家住宅である。

武藤家は江戸時代に絹屋の屋号で旅籠を営み、明治になってからは昭和三十九年まで鶉沼郵便局として営業していた。一時は空家になっていたが市が修復し、平成二十年五月から中山道鶉沼宿町屋館として公開している。

主屋・附属屋・離れの三棟は各務原市指定文化財になっている。八寸(約二十四せ疋)角の大黒柱・太い梁・一階の庇(ひさし)を支える持ち送り・二階のドーム天井など明治期における町人の力を示していると言えよう。

また館内には、歴史的な資料や旧家にあつた家具や道具なども展示され、一見に値すると思われ。秋いそと

町屋の庭の

たたずまい

## 訪ねてみよう中山道鶺沼宿

### ⑬ 鶺沼宿本陣

桜井家

中山道鶺沼宿ボランティアガイド



中山道鶺沼宿の本陣は、江戸時代を通じて桜井家が勤めた。桜井家は、江戸時代の始めころ、宿場の成立とともに西町に移り住んだと伝えられ、本陣のほか問屋、庄屋も兼ね、名実ともに鶺沼宿の中心的存在であった。建物も、明治二十四年の濃尾大震災で倒壊し現在その面影をしのぶものは存在していない。残された絵図から建坪は百七十四坪あり、門、玄関、上段の間のほか、酒造蔵や築山、泉水付きの庭などを備えた大きな屋敷であったことを知る事ができる。さらに本陣には、裏門から竹藪を抜けて大安寺に達する抜け道があったといふ。桜井家は問屋、庄屋も兼ねたことから、十四代將軍徳川家茂に嫁いだ皇女和宮の通行や伊能忠敬が鶺沼宿を訪れた様子など、当時の出来事をつづった「鶺沼宿万代記」「和宮下向関係本陣留帳」など多くの古文書が現在も残されている。

## 訪ねてみよう中山道鶺沼宿

### ⑭ 脇本陣「緑風」

中山道鶺沼宿ボランティアガイド



本曾川が鶺沼大伊木の流域を流れる。そこから少し上流の伊木山の対岸、犬山と扶桑の境界付近に位置する御囲堤。その御囲堤を防御するかたちで張出した百間猿尾あたりに、上流からの速い流れが当たる。流れは、そこから大きく曲がり西に向く。大河の流れは今も変わらずゆったりだ。自然をそのまま残した本曾川の原風景がそこにある。その原風景が、いま鶺沼宿脇本陣にある。上段の間・襖絵「緑風」である。作者・山田隆量、日本美術院院友は、本曾川を背景に新緑間もない木立を精緻(せいち)に描写し、凜(れい)んとした樹の枝振りの緊張感を表現するため土佐和紙を用い、墨だけの水墨画にしている。そして墨の濃淡は、若葉の色を見せている。

鶺沼宿脇本陣へどうぞお越し下さい。きっとさわやかな風を感じとっていたけるものと思います。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



⑬ 二ノ宮神社と  
保食大神の石碑  
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

二ノ宮神社は中山道鶉沼宿の脇本陣の西に位置する。門前には、「金比羅大権現」の常夜灯が見られ、石段を登ったところに境内がある。東側には幅十尺、奥行き七尺ほどの舞台が建てられている。以前は奈落や回り舞台があったそう、往時の人々がここで歌舞伎を楽しんでいたことがしのばれる。

本殿へ通じる石段の脇に、六世紀頃の円墳に設けられた横穴式の石室の中が見える。このことから、この神社が古墳の丘の上に建てられていることが分かる。更に石段を登った正面に本殿がある。その両側の灯籠には明和二年（一七六五）の記述があり、江戸初期に宿場開設に当たって現在の地に移設されたものであるらしい。

境内東に、大正七年建立の「保食大神ウケモチノオオカミ」の石碑があり、明治以降も農業や養蚕の神として信仰の対象となっていたことがうかがえる。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



⑭ 芭蕉の句碑  
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

「古池や蛙飛び込む水の音」誰もが知る、この句を詠んだのは松尾芭蕉である。全国を旅した芭蕉は鶉沼宿にも三度立ち寄り脇本陣坂井家に宿泊している。貞享二年（一六八五）年三月「野ざらし紀行」の途路大垣より当地へ。三年後の七月には「更科紀行」のおり岐阜から鶉沼へ。三度目は、同年八月名古屋からの帰りに坂井家に泊まり、ふぐ汁のもてなしを受けている。

ここで、主人の求めに応じ珪化木（化石）に自作の句を彫りつけたといわれている。「ふく志るも喰へば喰せよまぐ乃酒」桃青 現在この碑は、五月に完成した脇本陣内に建てられている。旅する先々で、出会いふれあった人々に心を通わせ俳諧の道を極めていった芭蕉、清貧な姿ながら心豊かな生き方がふぐ汁の句にもあらわれている。 ※桃書とは芭蕉の別称

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



⑱ 中山道分間延絵図  
灯籠と祠(ほこら)  
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

町屋館に展示されている中山道分間延絵図は、道中奉行の命により、寛政十二年(一八〇〇)七月から七年の歳月を掛け中山道全体を实地踏査で作成されたものである。

各務郡鶉沼宿編は寛政十二年冬の調査に基づくもので、実に二百年前の鶉沼宿の姿をありのままに私たちに伝えてくれている。

絵図で最も特徴的な点は、大安寺川を上流で堰き止め、本陣近辺で東西両方向に分流引

水し、道の真ん中に水路を走らせていることである。そして、脇本陣前の分水点には、火防の神様である秋葉神社の石灯籠と祠が道の中央にまつられている。

江戸時代、火災の被害は深刻で鶉沼宿にも再三再四火災があり、数多くの記録が残されている。

路史に堂々と鎮座していた石灯籠は今、梅田家の露地先から平成の中山道を忙しそうに行き交う人々を静かに見つめている。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



⑰ 旅籠梅田家  
(茗荷屋)  
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

二ノ宮神社の南に梅田家はある。江戸時代から「茗荷屋(みょうがや)」として知られてきた大旅籠である。

明治二十四年(一八九一)の濃尾地震で被害を受けた鶉沼宿で、唯一倒壊しなかった建物と伝えられている。

現在の建物は、当家の伝承では百六十年前としており、文久三年(一八六三)の絵図に平面図として描かれていることを根拠としている。つし二階建て、棧瓦ぶき、切妻屋根

南面と北面に瓦ぶきのひさしをつける。

同家には引札と呼ばれる「めうがや士兵衛」家の宣伝用チラシの版木が残されている。定宿としていた各地の団体のほか、客引きなどしない優良な宿であると記してある。

代々この家に住んできた人たちの行き届いた手入れにより旅籠屋の様相を良好に今日まで伝えられてきている。

家屋のいたる所に優れた大工技術が見られる貴重な建物である。

## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿

### ⑬ 火の手を防いだ もちの木

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



年の瀬も迫った十二月二十八日、餅をついた鶴沼宿の若者たちは、余勢を駆って少し離れた金縄塚へと宝探しに出掛けた。若者たちが塚を掘っているところ内に火の手が上がった。火は瞬く間にその中心地一帯を焼き尽くしていく。そして火の勢いは、東側は大安寺川がこれを止め、西側はもちの木の大木が防いだとされる。

この火災で旅館・茶屋二十四軒を焼失する。宿場ではこの惨事

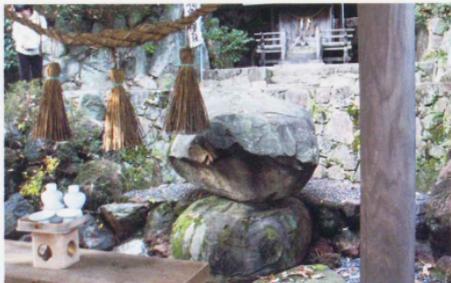
は、塚荒らしに対する天罰だったのではないかと伝わっている。以来、宿場内では暮れ二十八日には餅をつかない風習が残っていたという。

隣宿までの道程が遠いこの宿場は宿泊客も多く再建が急がれた。翌年十月ころまでにはおおむね復興することになる。この火災を契機に、旅籠屋は全て土蔵造り、瓦葺き屋根に一新する。天保四年（一八三三）師走の出来事である。

## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿

### ⑭ 石亀神社と 鶴沼石

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



中山道と八木山通りの信号交差点を北に上ると左手に山があり、ここは石亀神社である。境内に入り少し登ると「石亀さん」(鶴沼石)が鎮座している。

赤ん坊の夜泣き、母乳不足の折によく参拝したとされている。今でも周辺はよく管理されており、容易に参拝することができる。も

ともとは慶仙寺山のふもととの街道沿いにあったが、昭和五十七年（一九八二）に現在の場所へ移された。

「石亀さん」に面し左手を見ると大きな壁と広い空き地がある。ここに石が山積みしてあるので、鶴沼石を採掘していた場所であることが分かる。周辺はかつて鶴沼石を産出する石切り場であった。鶴沼石は緻密な硬質砂岩で、加工が難しく手間はかかるが、風化しにくい。

他地域のものに比べ良質なので尾張藩主の墓石としても使われ、御止やま（おとどめやま）でもあった。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



② 空安寺  
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

宿場の西の入口(見附)を過ぎた右手に空安寺がある。この寺は、真宗大谷派に属し光雲山空安寺という。空安寺縁起書によれば、長岡十左衛門の子千次郎が十三歳(二四八二)で出家し、本願寺八世の門跡の蓮如上人の直弟子になり師に従って巡行の途中、蘇原の寺島において御下命を受け文明十六年(二四八四)に坊舎を建たと記す。

その後京都の山科にて、蓮如上人御直筆の「阿弥陀如来絵像(寺宝)」を授かり、文明十七年(二四八五)寺号を空安寺と公称。寺はその後、鶉沼の小伊木の地を経て天文三年(二五三四)に羽場町のこの地に移り今日に至っている。住職は初代道念(千次郎)から続き、現在は、二十一代長岡宗円となっている。

寺院敷地内には史跡、衣裳塚古墳を有し、五百余年の長きに亘り法灯が綿々と受け継がれ今日に至っている。

## 訪ねてみよう中山道鶉沼宿



① 弘法堂と石仏群  
中山道鶉沼宿ボランティアガイド

八木山交差点から西へ行く途中に弘法堂がある。大正初期に創建されたお堂が最近建て替えられた。堂の正面は八木山山頂と一直線になっている。堂内には空海の尊像がまつられている。ここには十三観音など石仏、石碑もいくつかある。

お堂の裏側には、正徳元年(二七一二)の廻国供養塔がある。正面には「奉納大乘妙典六十六部日本廻国」と刻まれている。六十六部は六部と称することもある。堂西側には「奉納順拜供養塔秩父坂東」というものもある。先日町屋館を訪れた老夫婦からこの六十六部のことを尋ねられた。調べてみると六十六部廻国聖は、日本全国六十六か国を巡礼し一か国一か所の霊場に法華経を一部ずつ納めて歩くものとされている。しかし、六十六部廻国巡礼の風習がいつから始まったものかなぜ供養塔がここにあるかなどについてはよく分かっていない。

## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿

### ②③ 衣裳塚古墳

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



各務原市には多くの古墳が点在している。鶴沼宿周辺だけでも狐塚・金縄塚・坊の塚など名のあるものから、名もなき小さな古墳まで一連の古墳群を形成し、かつてこの地域を治めた一大勢力があったことを伺い知ることができる。

中山道の北側、空安寺の東隣にある衣裳塚古墳も鶴沼宿周辺の古墳の一つで、形状は円墳である。直径約五十二メートル、高さ約七メートルで四世紀後半に造られたと

考えられ、円墳としては県内最大である。墳丘の一部、特に西側部分が削られており、この形状から前方後円墳ではないかともいわれている。現在は県指定史跡になっているが、発掘の跡はなく、まだ謎が多い。

ちなみに、前方後円墳として県下最大級の規模を誇る坊の塚古墳はここから三百メートルほど南西方向にある。中山道を少し寄り道して外周を散策してみるのはいかがだろうか。

## 訪ねてみよう中山道鶴沼宿

### ②④ 一年を振り返って

中山道鶴沼宿ボランティアガイド



中山道鶴沼宿とその近辺の歴史遺産などを紹介してきて一年。連載は二十三回を終えましたが、読者の皆さま方には読んで読んでいただけましたでしょうか。

うとうと坂から鶴沼宿までの中山道、歩いてみると道の両側には石碑、地蔵、神社等多くありました。私たちボランティアガイドが互いに学び合い話し合ってきたことをご案内してきました。

「ウォーキングをしなから初めて知った場所

もあり、毎月の記事も読んでいる「案内記事」を片手に実際歩いてみて実感できた、など、うれしい感想も聞かせて励まされました。

さて、第二部として四月からは約一年掛けて鶴沼宿から西へ各務原台地を訪ねます。各務原、蘇原、那加を経て新加納立場まで中山道の道筋およびその周辺をご案内します。

次号新年度は「坊の塚古墳」より始め、ふるさと再発見への旅を続けます。








**アクア・トトぎふ**  
 岐阜県世界淡水魚園水族館

<http://aquatotto.com>  
 〒501-6021 岐阜県各務原市川島並田町1453番地  
 TEL.0586-89-8200 FAX.0586-89-8201

緑と水の楽園  
**OASIS  
 PARK**




**株式会社 オアシスパーク**  
 〒501-6021 岐阜県各務原市川島並田町1564-1  
 TEL.0586-89-6766 FAX.0586-89-7721  
<http://www.oasispark.co.jp> e-mail:info@oasispark.co.jp

# 篝火

会社  
 寺町1丁目543番地  
 X058-384-1230  
[kukawa.co.jp](http://kukawa.co.jp)

# 洲

3番地  
 30 PMS-00-PM9-00  
 三木曜日

# 島屋

寺町2の17  
 84-0233

# びのを

1丁目264  
**I-0154**  
 X058-385-4621  
[www.yad.jp](http://www.yad.jp)

## 中山道について

中山道は古代から東西をつなぐ重要な道であった東山道を元に、江戸時代に五街道の一つとして整備されました。全長は約534kmあり、宿場は板橋から守山まで67宿（東海道と合流する草津・犬津を含めると69宿）が設置されており、岐阜県内には17宿がありました。

太平洋側を通る東海道とともに江戸と京を結ぶ主要な街道で、木曾路を通ることから木曾街道などともいわれています。中山道は「木曾の棧、太田の渡し、碓氷峠が無くばよい」とうたわれる難所をはじめ険しい山間部を抜ける起伏の多い道でした。しかし、河川の増水による川止め等の障害が多かった東海道に比べると、予定通りの通行が可能であるという利点から、利用価値の高い街道でした。

各務原市図書館

114210446

## 鶉沼宿について

鶉沼宿は、中山道69次のうち京に向かって52番目の宿場でした。東の太田宿まで2里（約8km）、西の加納宿まで4里10町（約17km）の位置にありました。宿場の全長は東西7町半8間（約840m）あり、ほぼ中央を横切る大安寺川で東町と西町に分かれます。

天保14年（1843）の記録によると、宿場内の家数68軒・人口246人となっています。当時を偲ぶことのできる建造物は、ほとんど姿を消してしまいましたが、江戸時代にかかれた家並図に見られる地割は現在もほぼそのまま残っています。